

コロナ禍の3年間は、平塚市の各地域でも、これまで「続ける」ことに重きを置かれていた地域イベントや行事の在り方を見つめ直すきっかけとなり、行事の開催の有無、実施内容だけでなく、会議や情報共有の方法を工夫していく動きもみられるようになりました。

これからの地域活動に取り組んでいくうえでは、様々な世代の人たちが一緒に地域の目標や活動を考え・実践していける「場」を設けていくことが重要になり、その場を構成する「**チーム（体制）づくり**」が大切になってくると思います。

さらに、その「場」において、幅広く声を聞くことから始める「**プロセス（手順）**」に沿って、より実効性ある「**ツール（方法）**」を活用しながら内容を確認・合意し、幅広い世代が賛同・参画していけるように整えていくことが重要なカギを握っていると思います。

ここでは、それぞれについて、押さえておくポイントを考えてみます。

活動を進める「チーム（体制）」づくりのポイント

1 地域の特性にもよりますが、これまでの地域活動の担い手は、地縁関係、年功や経験重視により選出された役員が中心となり、決められた職務を分担して運営していくことが多かったように思います。時として、負担感を感じる方や任期以降は関わりたくないという残念な声を聞くことがあります。

2 昨今、活発に地域活動に取り組んでいる地域では、従来の枠にとらわれず、楽しみながら、つながりの大切さを実感できるような体制づくりを重視しています。

3 そのためのポイントとしては、わがまち／暮らしに何らかの関わりを持ちたいと思う人たちへ声を掛け、幅広く意見を聞き、運営に反映させるなど、多くの方が参画できる“場”をつくっていくことが大切です。

4 また、一部の地域団体役員に負担が集中するトップダウン型から、賛同者・共感者がサポーターとして参画できるチーム協力型へ段階的に変えていく時期にきています。

5 PTA活動や夏祭りのような親子で参加する機会をきっかけに地域活動に“楽しく”関わっていこうと思える仕組み（地域デビュー）を考えていくことがますます重要になっています。

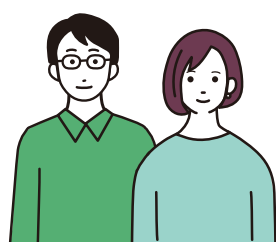
6 このような幅広い世代の意欲的なチームで様々な検討を進めることにより、行政との連携・協働につながっていくと思われます。

△ これまで

- 地縁／年功／経験重視の役員選出、役職・責務の固定化
- 役員中心の企画運営による負担感
- 行政側への陳情・依存
- もうやりたくない感

○ これから

- 若い人／新しい人／想いのある人の受入れと適性を活かす役割担当へ
- サポーター・ボランティアを含めたチーム型へ
- 行政との連携・協働へ
- またやりたい・協力したい感

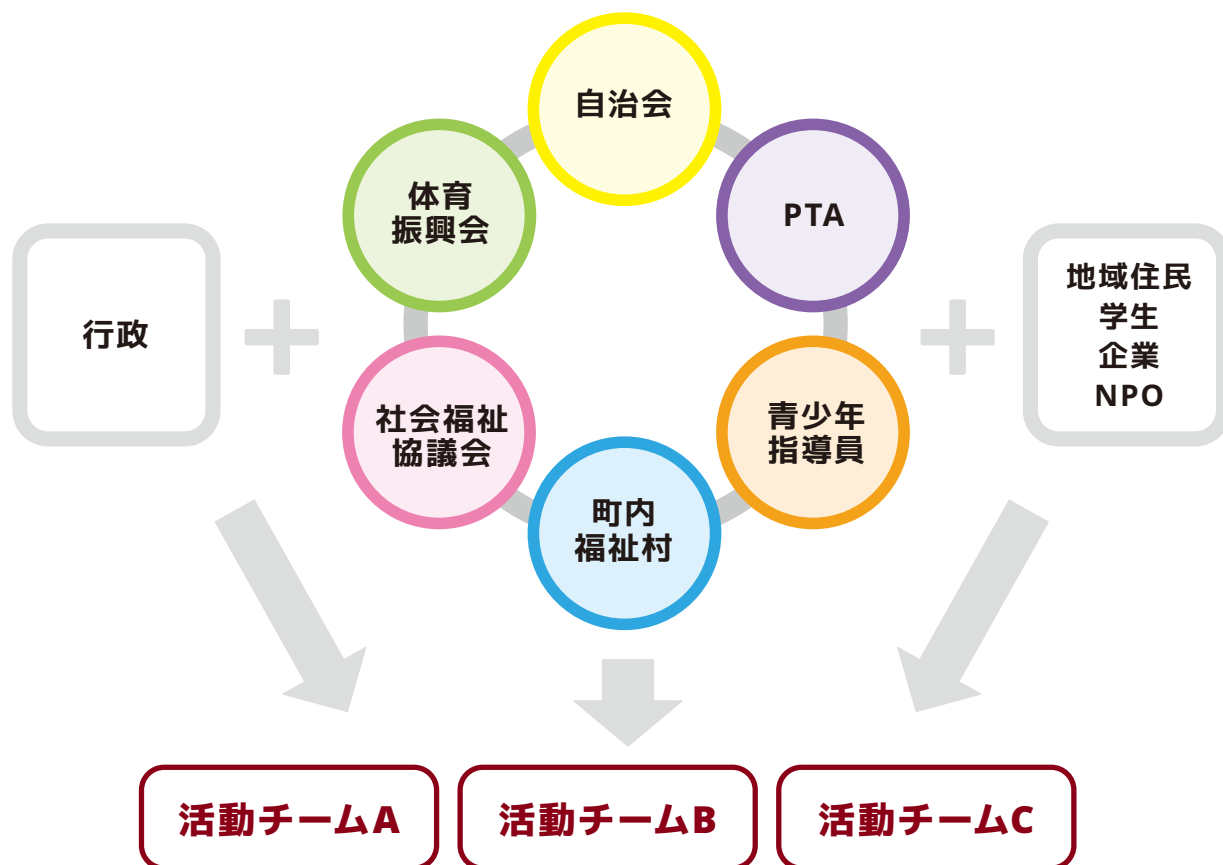


チーム (体制)

デビューの機会
なかまづくりの機会



[地域の目標や活動を考え・実践する「場」づくり]



活動に取り組む「プロセス（手順）」のポイント

1 地域に住む人たちの世帯構成、暮らし方や価値観が変わっていく中では、改めて地域の方々が「自分ごと」として「共感・実感」できる「活動」であるかを再確認することが大切です。

2 すなわち、前例踏襲や担い手（役員）の思い込みではなく、そこに住む人たちの「**多様な思いや声を知る**（P13 図1 ①②）」から再スタートし、「**共感できる目標を立て**（③）」、そのうえで「**共に楽しく参加したくなる取り組み**（④）**を探り出す**」、そして「**振り返り**（⑤）」により参加者・関係者の声を次回に活かすことが重要です。

△ これまで

- 若い世代の潜在的な声・ニーズの把握不足
- 役員や関係者中心の意見交換
- 前例踏襲を基本とするマイナーチェンジ
- ターゲット、目的等の共感共有の不足
- “楽しい感”のPR不足

○ これから

- 幅広い世代の声を掘り起こすことからのスタート
- 参加してみよう、やってみよう感を促すテーマ、キャッチコピーでのPR
- 参加者からの楽しかったこと、残念だったことの声の振り返りと反映

活動を伝える「ツール（方法）」のポイント

1 地域に住む人達が地域情報を入手する手段は、紙媒体（回覧板、公民館だより配布など）から電子媒体（インターネット、SNSなど）が主流になりつつあり、これからは**双方向型、参加型の仕掛け**をつくっていくことが重要です。

2 また、様々な地域の課題や良さを広く知ってもらい、取り組みについて共感を持ってもらうためには、各プロセスに応じて、**客観（データによる可視化）と実感（まち歩きのようなリアルな確認・体感）により「自分ごと」化**していくことも大切です。

3 さらに、幅広い年代の人たちで意見を交わすことにより新しい発想、参加意欲の向上につながっていきます。

△ これまで

- 紙・活字ベースの「〇〇だより／ニュース」など、片方向の情報発信
- 自治会／登録世帯ベースの回覧・周知を基本とすることによるスピード感の不足
- 実感・臨場感の伝わり方の不足

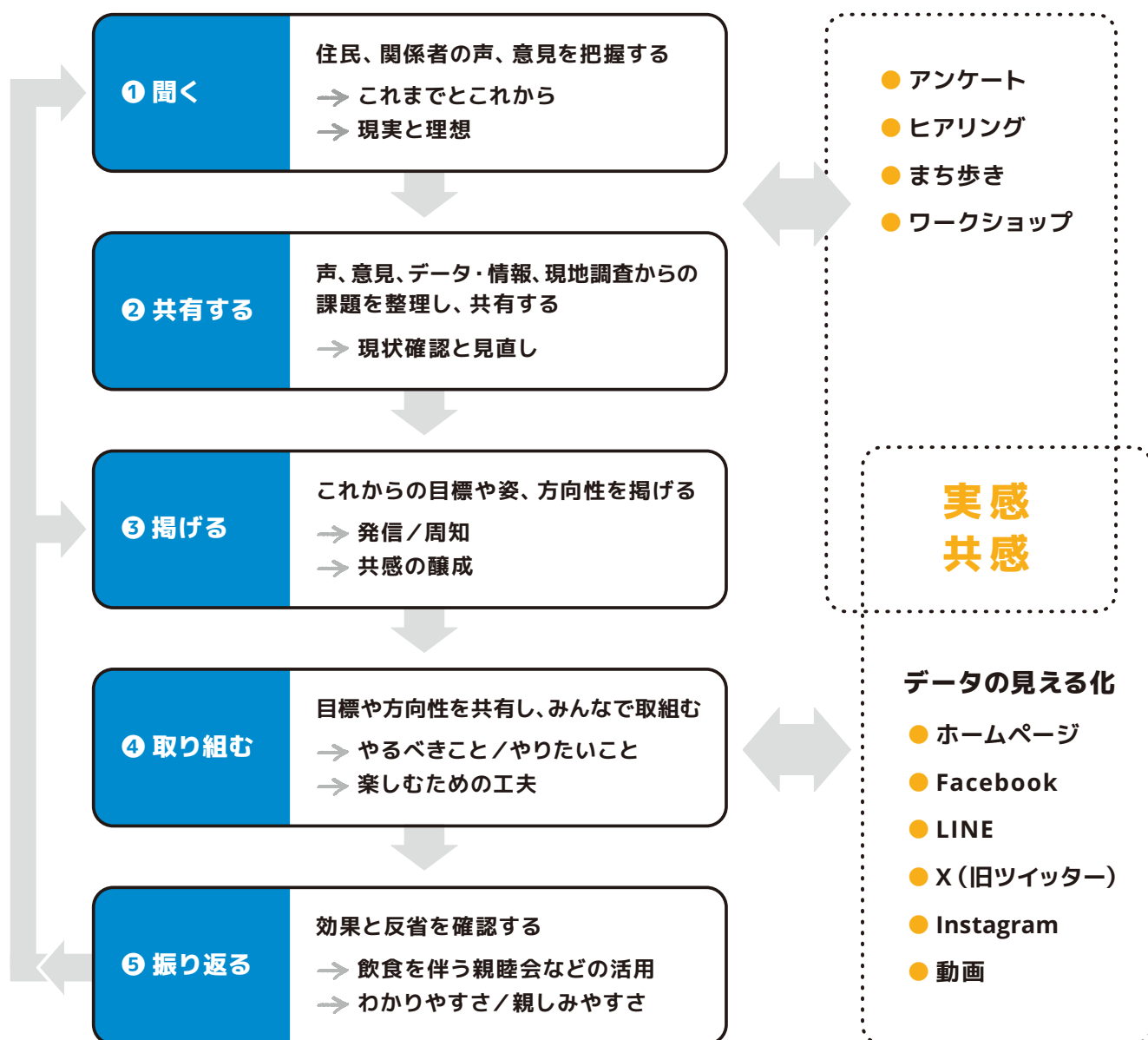
○ これから

- 電子媒体を活用したスピード感あるオープンな情報発信と幅広い周知
- 声を出しやすい、意見を言いやすい場づくり
- データの見える化、動画活用によるわかりやすさ、実感しやすい

プロセス (手順)



ツール (方法)



(図1)